
jokers外伝——未熟な紅蓮剣士——

シルバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

j o k e r s 外伝——未熟な紅蓮剣士——

【Nコード】

N1317J

【作者名】

シルバー

【あらすじ】

苦しくても、辛くても、俺は生き抜いてやる——…カイルがj o k e r sに入るまでを描く「j o k e r s」の過去編。彼が剣を握り、仲間と出会い、戦場を渡り歩いた波乱の日々。j o k e r s本編で明かされなかったカイルの幼いころからj o k e r s加入までを一人称視点で描きます。（※更新は不定期となります）

プロローグ（前書き）

前から予定していたカイルの過去編です！
慣れない一人称に挑戦しているので少し文章がおかしい可能性もあります。ご了承ください。

プロローグ

俺は限界だった。体力的に。

クソ………なんで俺はこんなキツイ任務ばかりやらされるんだ？
ミゲルとかミメットはもっと楽な任務やってるんだが。

ちなみに俺は今、“護衛”の任務を終わらせてjokers事務所に帰還する所だ。
護衛ってのもピンキリなんだが………今回は酷かったと言っとくべきか。

事務所に帰った俺を出迎えてくれたのは………マテイスのい

びき。

「くかゝ……………」

随分と幸せそうに机に突っ伏して居眠りしてるjokersのリーダー、マティス。

俺を馬車馬のごとく任務に向かわせて自分は居眠りか。机ごと叩き斬ってやろうかと一瞬思った。

マティスが起きる気配は…………無し。叩き起こしてもいいが、反省しないのは分かり切ってる。

このまま何もしないのではさすがにストレスが溜まる。

俺はマティスの顔に適当にペンで落書きして、奥にある自室に向かうことにした。

「ZZZZZZ……………」

寝息を起てるマティスの目の周りは濃い黒の線がぐるぐると円を描き、口元にも同じ模様が描かれている。

…………しょうもない気もするが、少しスッキリした気分では俺はその場から立ち去った。

jokersには1人一室ずつ自室があてがわれている。大きさは…………だいたい畳六畳くらい。

俺の自室の隣にはミゲルの自室もある。で、さらにその隣がミメツトの自室だ。マティスの自室は無い。本人が必要無いかららしい。

俺は今その自室の前にたどり着いた。瞼が重い……………とりあえず寝るかな。

ガチャ

突然隣のドアが開いた。

「ようカイル！今から飲みに行か——」

無視、無視。相手にするのも面倒だ。そのテンションが鬱陶しい。

「カイル、無視するなって！俺いい店知ってるからさ！今から飲みにふぐうつ……」

五月蠅いから鳩尾に一撃決めてやると、俺の目の前にいる隣の部屋から出てきたバシャーモは腹を押さえて悶絶する。

名前？知らん。

俺はそのまま悶絶しているバシャーモを放置して自室に入る。分かっていると思うがこいつもjokersの構成員なんだ。

一応実力はあるが……………疲れてる俺の身にもなってほしい。

「俺は……Jokersのミゲルだふうっ！」

入る直前に足元の五月蠅い阿呆にもう一撃決めておく。無意識の内に足が動いていたのはよほどコイツに対してムカついていたのかもしれない。

ミゲルを始末し自室に入った俺は、そのままためらいなく自室のベッドにダイブするべく床を蹴った……。のだが体はロクに浮かず、ベッドの角に激突してしまった。

ドスンという派手な音を立てて着地する俺。それに続いてドサドサと柵から落下する本やガラクタ。

俺が宙に浮かなかったのは……。大剣と刀を身に着けたままだったからだ。俺は武装を解かずにダイブしたらしい。
……かなり疲れてるな、俺。

武装時と武装無しとでは重量は大きく変わる。何故なら両方共金属製であるから。

「いって……」

頭をさすりながら俺は起き上がると、重い大剣と刀を降ろして散らばってしまった本を拾い上げる。

「そういや、まだこれ全部読んでないような……………」

俺の手にあるのはjokers加入時にマティスに渡された歴史とかなんとかの分厚い本。読めって言われたんだが分厚すぎる上に興味が無いものを読めと言うのは酷だろ。
開く気にもならない。

「まあ、いいだろ」

俺はその分厚い本を本棚に乱雑に放り込み、片付けを続ける。続いて手に取ったのは薄汚れた白く薄い本。

「……………」

俺の手が思わず止まり、ある一点に釘付けになる。

その本には表紙に一枚の写真が貼られていた。その写真に写っているのは……………傭兵時代の俺とその相棒。

俺の目に映るのは写真の中で笑顔を浮かべるジュカイン。

「……………アルバム、か」

俺はおもむろにアルバムをペラペラとめくる。

すると、しっかり綴じられてなかった一枚の写真がアルバムから滑

り落ちた。

「ん、これは……」

その写真には今より少し若い鍛冶職人クロスと、幼いマグマラシとジユプトルが写っていた。

……これ、あの時の写真か。

あれは確か——八年前、だったな。

“アベル”の頃の自分の写真を見つめ、懐かしむようにアルバムを広げてみることにした。

一：幼き二人の盗人（前書き）

今回だけ、三人称視点となります。都合上こっちの方がよかったですし。

では、どうぞ！

一..幼き二人の盗人

――八年前――

「待ちやがれガキどもおおおお!!!」

とある街の商店街に響く一つの怒鳴り声。

「ん？」

商店街を歩いていた一体のヘラクロスが怒鳴り声のした方向に振り向く。

と、その瞬間何かが彼の横を駆け抜けた。

「な、なんだ!？」

すぐに振り返ったヘラクロスの目には、二匹のポケモンが走り去るのが見えた。

それを追う怒鳴り声の主であろうゴーリキーもヘラクロスの横を駆け抜ける。

そのゴーリキーの右手には、一メートル程の長さの鉄パイプ。

「物騒だなあ。大丈夫かさっきのマグマラシとジュプトル」

二匹のポケモンを追うゴーリキーの背を見ながらヘラクロスはそう呟く。が、この街ではこんなことは日常茶飯事である。彼は何事もなかったかの用に再び歩き出した。

「クッソ……しつこいぞあいつ……どうにかなんないのかアベル！」

全力疾走しながら隣のポケモンに話しかける一匹のジュプトル。

ジュプトルの隣を走るアベルと呼ばれたマグマラシは溜め息を吐く。

「五月蠅い。静かにしてくれチェス。今考えてる」

「急いでくれよ！あいつ意外と速いから撒けないし、このままじゃ捕まるって！」

全力疾走という苦しい状況で喚き出すジュプトルのチェス。普通に凄い。

「ゴラアアア！！待てやガキイイ！！」

「げ……もう来やがった」

アベルの言葉通り、二人の後ろからは鉄パイプ装備で恐ろしさ二倍のゴリキーが鬼のような形相で追いかけてくる。

「あいつも頑張るなあ。リンゴ二箱盗られたくらいで必死だなあ」

「おい、あそこの店から盗ったの四度目だぞ？流石に切れたんだろ」

右腕で抱えたリンゴのいくつか入った箱を軽く叩きながら言うチェスターに指摘するアベル。

その余裕そうな態度にますます腹を立てたのか、ゴリキーが手に持った鉄パイプを振りかぶった。

「うおっ!？」

「何っ!？」

アベルとチェスターが揃って声を上げたと同時にアベルの頬を鉄パイプが掠める。

そう、ゴリキーが鉄パイプを投げつけたのだが、運良く二人には命中しなかったのだ。

「へたくそ!」

「煽るな馬鹿!!」

しかし幸運もつかの間、鉄パイプが外れたのを見たチェスターが相手を挑発してしまう。

勿論ご乱心のゴーリキーはますます荒れ狂う。

「待てやああああ！！！！」

「あゝうるせえ！種マシンガン！！」

スピードが怒りで増したゴーリキーに抵抗するべくチェスターは振り向き、口から連続で小さな弾を吐き出す。

が、ゴーリキーは鉄パイプを振るって小さな弾丸を軽々と弾いてしまふ。

「マジかよ！？」

驚くチェスターを余所にアベルは黙ってこの状況を切り抜ける方向を思案する。

「……おいチェス、ここを右に曲がるぞ！」

アベルはチェスにそう告げるとすぐさま方向転換して右手の通路へと進む。

「つて早く言えよ！」

チェスもなんとかスピードを殺して右の通路に走る。

二人の走り込んだ右の通路には、二本の別れ道があり、その分岐点にはマンホールが設置されていた。

「おお！別れ道で撒くのか！流石アベル！」

チェスが嬉しそうにアベルに笑みを向けるが、アベルは首を横に振る。

「もし運悪く逃げた道に来られたらおしまいだろ？」

「じゃあどうすんだよ！」

慌てるチェスターを無視して道の分岐点で止まるアベル。

それに合わせてチェスターも止まるが、その顔に最初の余裕は一切ない。

アベルは追ってくるゴーリキーを確認すると、口を大きく開いた。

「こうするんだよ、煙幕！」

アベルの口から放出される黒い煙で通路の分岐点は包まれ、ゴーリキーは煙の手間で立ち止まる。

アベルらの行動を見たゴーリキーは小馬鹿にするようにニヤリと笑みを浮かべた。

「へっ！どっちに逃げたかを煙で隠すつもりだろうが……そうはいくかガキ！」

ゴーリキーはそう言って煙を突っ切るが、通路の先にはポケモンの影はなかった。

「な！？どこ行きやがった！！」

ゴーリキーはキョロキョロと見回し、何やらブツブツと愚痴を吐くと別れ道の片方を選んで再び走っていった。

ゴリキーの去った後、通路の分岐点にあるマンホールの蓋が少しだけずれて、隙間からマグマラシの顔がひょっこり突き出された。

「……行っただか？」

下からそう聞くチェスにアベルは頷く。

「ああ、誰もいない」

アベルのその一言で気が緩んだのか、チェスは崩れるようにコンクリートの床に座り込んだ。

そう、あの時の煙幕を利用してアベル達はマンホールから下水道に逃げ込んだのだ。

「しかし、機転が利くよな〜アベルは」

「これだけ長く同じことやってれば逃げるための知恵はいくらでも身に付くだろ」

「はっ、違えねえ」

ゴリキーから逃げ切った二人は談笑しながら盗んだリングοにかじりつく。

少々臭いのキツイ下水道のコンクリートの床でリンゴを頬張る薄汚れたマグマラシのアベル。

そう、彼が後のjokersの大剣使い“カイル”だ。

これは、彼が剣を握り、jokersへ入ることになるまでを描く物語――

一：幼き二人の盗人（後書き）

そういえば今日はクリスマス。夜更かししてもサンタは来ませんね（笑）

とりあえず、次はいつになるか分かりません。外伝ですし、仕方ないですね。

なぜカイルがアベルという名前なのかは後ほど……

二：アベル、チェス、クーノ（前書き）

たまに更新と言いつつ約一年ぶりとか……（＾ω＾；）

次回から話が動き始めます。ではどうぞ

（・∀・）っ

二…アベル、チェス、クローノ

廃れた街、ダムド。

この街はどっかのお偉いさんの馬鹿息子とやらが権力をもってる街で、ロクな政治……だったかな？ができてないからかなり酷いことになってる。

ボロ儲けしてる腐った金持ちもいれば、寝床を持たないポケモンだって沢山いる。この街のポケモンの四人に一人は暮らしに困ってるポケモンだ。

勿論俺達みたいな孤児も沢山いる。ま、たまに裏路地で野垂れ死んだりしてるけど。それほど食べるのだけで精一杯な毎日を送ってる。

———まあ、俺は今の方が幸せだけど。

俺が前にいた孤児院は酷いもんで、子供達は大人のストレス解消に殴られるのなんか当たり前だった。

「アベル、何考え事してんだよ？」

俺の隣を歩いてるジュプトルが声をかけてくる。

こいつは俺の相棒、チェスター。俺はチェスって呼んでる。本当の名前は違うけど、今はこの名前を使ってる。

「あつ、もしかしてまた何か盗む作戦か？」

楽しそうにそう聞いてくるチェスにつられて俺も笑みを零す。

「いや、ちょっと……あの学校のことが気になってさ」

あの学校っていうのはこの街唯一の学校だ。たしかダムド学園だったっけ？

俺達孤児にとって学校は憧れの存在。金持ちしか通えないその学園はいつもピカピカで、たまにキンコンという音が響いてくる。

「あゝ、あの学校といえば、めっちゃくちゃ可愛いベイリーフがいたよな〜！」

チェスが少し興奮気味にそう言う。こいつは学園に通うお嬢様のベイリーフに惚れているらしくて……ま、無理だと思うけど。

するとチェスが急にそのベイリーフについて熱く語り始めた。俺は苦笑しながらそれを聞く。

やっぱり前の孤児院を脱走して正解だ。俺は今に満足してるんだから。

とりあえずさっきのゴーリキーが戻ってくると面倒だから、俺達の生活している廃墟に戻ることにした。

キレイな表通りを通る必要なんてない。通れば小汚い俺達に金持ち達の冷たい視線が突き刺さってくる。だから、通りたくもない。

「この前とったパンもあるし、暫くは充分食べられるよなアベル！」

リンゴの入った箱を揺らしながら頬をほころばせるチェス。

空腹はキライだ。だから食料があると嬉しくなるのは俺も同じ。つい頬が緩んでしまう。

もう少し歩くと廃墟に着く。俺達にとってはそこが家だから、自然と歩くのも速くなる。

だけどそこで、ものすごく面倒くさいことになってしまった。

「来た来た。お前らが悪いドロボーだな！」

「「ドロボーだな！」」

目の前に並ぶ三匹のポケモン。

どいつもこいつも進化前で強そうには見えない。

多分真ん中の黄色い袋みたいな頭の人型ポケモン、マクノシタがリーダーだな。一番最初に叫んだし、後の二匹もそれに続けて叫んだ。まさにガキ大将だ。

「な、なんだよお前ら」

隣のチェスが少し怯んで後退りする。多分あいつらが盗みのことを

知ってるからだ。

目つきが悪いんだから睨み付けてやればいいのにな。

怯んだチェスを見て調子に乗ったのか、マクノシタが胸を張って答えた。

「お前らが最近悪さをしてるって学校でも有名だったんだ！だからおれが捕まえてやる！」

……だろうと思った。

俺はため息を吐き、自信満々なマクノシタに一言。

「単純なんだな」

「そうだ、おれは純粹なんだ！だからお前らみたいな悪い奴らは許さないぞ！」

バカにされたのに気付いてないなコイツ。学校行ってるくせにバカだ。

マクノシタは二人の手下？仲間かな……に一言言うと、俺達に突っ込んできた。

「チェス、やっちゃおう」

「だ、大丈夫だよな？」

相変わらず“盗み”を知られてることに怯んでるチェスをよそに、俺はとりあえず仲間の一人を狙うことにする。

「火の粉」

俺はそう呟き、口から炎の塊を吐き出す。

それはマクノシタの右側にいたアサナンという白い人型のヨガポケモンに当たり、そいつは悲鳴を上げる。

「あ、熱い！助けてえー！」

アサナンは地面を転がりながらそう叫ぶ。……情けない。

「こ、このやろー！」

アサナンの悲鳴にビビったのか、動けないマクノシタの代わりに俺に拳を突き出すのは筋肉質のこれまた人型のポケモン、ワンリキー。マクノシタより勇気あるじゃん。

「よっと」

進化したゴーストには逃げるしかなかったけど、ワンリキーなら戦える。

俺は軽々と拳をかわす。

「とっておきだ。“火炎車”！」

そこから俺は体に火を纏わせ、回転しながらワンリキーに体当たりする。これが俺の必殺技、“火炎車”だ。

「う、うわぁー！」

まともに受けたワンリキーは吹き飛ばされ、目を回して気絶してしまった。

「クソお……先にお前からだ！」

マクノシタは仲間を蹴散らした俺でなく、チェスに飛びかかった。かなりヒビリだな、こいつ。

「お、オレえ！？」

チェスは俺の戦いを傍観してたから、急に殴りかかってきたマクノシタの拳をまともに受けてしまい、よろよろと後退る。

マクノシタはキレイにパンチが決まったことで調子を取り戻したらしく、続けてチェスに攻撃する。

「突っ張り」！

「っ、なめんなあ！ “叩きつける”！」

マクノシタの張り手に対し、チェスは頭の葉っぱを思いっ切り叩きつけて怯ませる。

一旦お互いの距離が開き、お互いが息を整える。チェスもようやくやる気になったようでギロリとマクノシタを睨んでいた。

向かい合う二人の間に一瞬だけ殺気のようなものが漂う。つっても、子供のモノだし全然大したことないんだけど。

「へっくしゅっ」

……緊張感漂う中悪いが、ついクシャミをしてしまった。
が、それが合図となったのか、お互いが一気に間合いを詰める。

そこで、マクノシタの叫びが聞こえた。

「おれは——お前らを捕まえてリーフちゃんに告白するんだよお！」

……つまりこいつは、カッコイイことやって好きな娘に思いを伝えるために俺達に挑んだんだな。少し呆れた。

が、同時にニヤリと笑ってしまった。何故なら——

「さ、せ、る、かぁーっ!!」

チェスの怒号が響き、“叩きつける”を容赦なくマクノシタに浴びせた。

まあ、学園通ってる不良お坊ちゃんに本気のチェスが負けるワケないな。

チェスは倒れ込むマクノシタに乱れた息を整えつつ一言。

「彼女は、やらん！」

そう、マクノシタの言ったりリーフちゃんは、チェスが思いを寄せているベイリーフの名前なんだ。だからチェスが必死になるのが読めた俺はつい笑ってしまったんだ。

俺は興奮して息の荒いチェスの肩を叩く。

「そんなに興奮するなって。たかがバカ相手に」

チェスは気絶したマクノシタを一睨みすると、くるりと背を向けた。

「わかってるって……帰ろう」

「おう。さっさと休みたいし」

俺もバカ達に背を向け、チェスと並んで歩き出した。

ん、バカ達はって？ほっとしても家に帰るでしょ。知らん知らん。

「なあアベル」

「ん？」

歩き出したと同時にチェスが俺に話しかけてきた。

「アベルはさ、女の子に興味ねーの？」

……何を聞くのかと思えば。そんなことか。

「俺は大人だからな」

「おい、真面目に答えろって。一目惚れとかないのかったの」

ふざける俺にチェスが少し睨みながら言う。

確かにチェスはリーフちゃんとやらの話をするが、俺はそんなのしないしな。

「一目惚れとかはないし、今は興味もない。女の子と遊んでる余裕なんてないし」

嘘だ。興味なんてありすぎて困る。何故ならお年頃だから。

でもそう言っとかないと、本当に生活を優先出来なくなったら困る。一種の自己暗示——だったかな？みたいな奴。

「アベルは本当に変な奴だよな」

ついには変と言われてしまったが、気にしない気にしない。オレハオンナノコニナンテキョウミナイ。

「つと、着いたな」

気付くと、自宅である廃墟に着いていた。

ボロボロの木製の家で、二階建て。窓は取り払われ、辺りに生い茂った草や壁のヒビが近寄りがたさを演出してる。

しかしそれすらも慣れてしまえば心地良く思えてしまうから恐ろしい。

こんな廃墟ならば他のポケモンも住処にしようと寄ってきてもおかしくないのだが、そんなことはまずない。

廃墟の入り口の戸にされた貼り紙があるからだ。

「ただいまーっ」と

チェスがその戸を勢いよく開く。

戸に書いてある文字——ガムド不動産の所持物ということを示すことが書いてある……らしい。俺もチェスも字なんて読めないし。

ちなみに紙は俺達の同居人が拾ってきたものだ。ガムド不動産はこの街を仕切ってる奴のモノだから、こんな貼り紙がある所には誰も寄り付かない。

「おかえり」

チェスの声にやや遅れて、そう声が奥から返ってくる。

さっさと上がると、俺達はとりあえずその同居人の元へいく。

奥にある居間のような部屋で、その同居してるポケモンが本を読んでいた。

俺は担いだ箱からリングを二個掴み、そのポケモンの目の前にあるボロい机に置く。

それに気付いた同居人が本から目を離しこちらに目を向ける。
水色の体色に甲羅を纏い、変わった形の耳のポケモン、カメール。
目には物知りメガネという物を着けている。

「やあ、帰ってきたんだね。リングありがとう」

「気にすんなってクーノ」

お礼を言うカメール――クーノ。持ちっ持たれっの関係だから気にしないでいいのに。

クーノは学者を目指して勉強してる。10歳の俺達より年上で15歳だ。

戦うのは苦手だけど知識がある。日雇いの仕事にたまに稼ぎに行くのが唯一俺達の収入になってるんだ。まあ、あんまり貰えないみたいだけど。

そんなクーノは俺達が持ってきたリンゴにかじり付いている。

俺とチェスもリングゴを取り出し、質素な飯だが皆で食うことにした。

「ところでクーノ。今日はチェスの恋敵がだな――」

「わーっ！言うな恥ずかしい！」

「へえ、それは是非聞きたいね」

くだらない談笑をしつつみんなで食うリングゴは、とびっきり美味しい。

こんな生活でも、俺にとっては充実した毎日だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1317j/>

jokers外伝——未熟な紅蓮剣士——

2010年11月9日23時47分発行